

CUT IN 35

Vol.35 2005年 2月号
発行 タイニシアリス
ディ・ブラッツ
アート・ネットワーク・ジャパン
編集部 新宿区京久町4-1-3
03-5366-8646 井上二郎
jira@tzn2.co-net.ne.jp
DTP ORANGE, OSASAWARA

ここに私たちの怒りの原点がある。

REVIEW

die prazte M.S.A. collection 2005

～何かの病原菌に犯される錯覚に陥ってしまいそうな
先進的で衝撃的なディ・ブラッツ芸術祭～
3/16(水)～5/5(木・祝)

の主調イメージだと思うのだが、少々誇張し過ぎだろうか。

このように力の場として舞台をイメージするとき、岡本太郎が持っていた若々しさは、認識の鋭さに形を変え、パラノイックに人生を追求する意志と子供のように戯れる遊戯を背後で支えていた戦前のアヴァンギャルドの「人間的な」知性が、その暖かみを投げ捨て、さまざまな力のぶつかり合う場に踊り出る。高踏的な知性の操作は足を踏みならす身体のダンスに取って代わり、舞台は言葉によって認識を生み出す行為の場になる。

たとえば岡本太郎の「私」、OM2の佐々木敦の「私」、イマージュオペラの脇川海里の「私」は、認識的な「私」である。彼らの舞台は徹底的に「私」にこだわり、「私」からしか出発しないとさえ言えるが、それは求心的な認識の場を生み出すことを狙ってのことであるように思う。もちろん「私」から出発することと自分のことを語ることは異なるので、彼らのパフォーマンス中に個人が語られることはない。個人を機械の付属部品のように扱う日本社会で「人間」の尊厳のあり方を丁寧に探ろうというのではない。彼らはヒューマニストではないので、「人間」も「動物」も「もの」も差別なく扱う。岡本太郎の「私」はベケットの小説そのままに道端のゴミになり、佐々木敦の「私」は暴走する「もの」となって荒れ狂い、脇川海里の「私」は死者の世界に入る。

彼らには他人の視線を組織し、ひとつの場にするための周到な計画があり、それを実行する情熱があり、自分を捨てる覚悟がある。カンパニーを支えるスタッフとともに気の遠くなるような準備を経て、毎回毎回観客の前に立ち続ける意志、それが集団としての生のあり様を私たちに示す。しかしそれは「人間」の輝きを見せるための無償の行為とも、「崇高」な瞬間の体験とも違うようだ。もっと醒めた体験、おそらく認識の場を生み出す意志とでも呼べるような生のあり様ではないだろうか。

なにもにも従属せず、所有せず、つねに形を変えて生き続ける意志の運動。この運動を続けるために示された岡本太郎の知性の輝きは今日のアヴァンギャルドたちにも流れている。しかし西欧近代がすべてを覆い尽くし、予想に反して苛烈さと残酷さに満ちた世界が生み出された今日、彼らの活動が美的体験よりもむしろ認識の場を生み出す方向に一步踏み込みはじめたことを、

(新野守広/劇評)

※スケジュール詳細は2面の表をご参照ください。

いよいよ開幕 東京国際芸術祭 2005 (2月2日～3月28日)

- スリーポイント・プロデュース ベケット・ライブvol.6『クアック』
下北沢「劇」小劇場 2月2日(水)～6日(日) ※1日:プレビュー公演
- 創作ネットワーク委員会+Ort.d.dプロデュース『昏睡』
にじやがも創造舎 2月24日(木)～28日(月)
- 飛ぶ劇場『Red Room Radio』
東京芸術劇場小ホール2 3月11日(金)～13日(日)
- アルカサバ・シアター [バレスチナ]『壁-占領下の物語II』
パークタワーホール 3月10日(木)～15日(火)
- ファミリア・プロダクション [チュニジア]『JUNUNジュヌン-狂気』
パークタワーホール 3月18日(金)～20日(祝・日)
- フォルクスビューネ [ドイツ]『終着駅アメリカ』
世田谷パブリックシアター 3月25日(金)～28日(月)
- <リージョナルシアター・シリーズ>
- 劇団無限蒸気社 [松山]『BARBER ORCHSTRA』
東京芸術劇場小ホール1 3月2日(水)～3日(木)
- 劇団人工子宮 [名古屋]『なつのくもゆき』
東京芸術劇場小ホール1 3月5日(土)～6日(日)
- トリコ・Aプロデュース[京都]『潔白少女 募集します』
東京芸術劇場小ホール1 3月8日(火)～10日(木)
- 劇団千年王国 [札幌]『SL』
東京芸術劇場小ホール1 3月12日(土)～13日(日)
- 大阪市立芸術創造館プロデュース [大阪]『背くらべ』
東京芸術劇場小ホール1 3月17日(木)～20日(日)

※問合せは東京国際芸術祭(TIF) ☎03-5961-5202

発表!! ディ・ブラッツ『ダンスが みたい! 新人シリーズ3』受賞作。

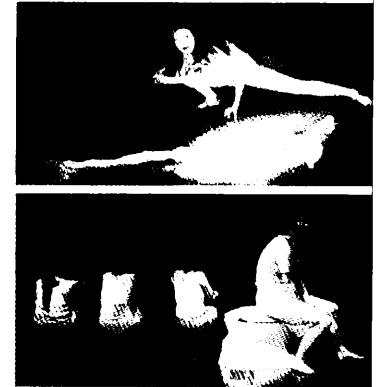
INTOWN

*「批評家賞」=アダチマミ×無所属
ベリリ「トランポリンの上で戦い合え!」
*「オーディエンス賞」=佐藤近代「シルク・マザー」

「ダンスがみたい! 新人シリーズ3」
(1月8日～19日)の2賞が決まりました。

尚、近々講評をネット上に載せる予定です。そちらもご覧下さい。HP=
<http://www.geocities.jp/azabubu>

●ダンスの新しい波を発振するダンス週間。5人の批評家による「批評家賞」は、当世の女の子の脱ジェンダーというのか、中性的身体の反抗的パフォーマンスに。一方「オーディエンス賞」には、着実な技術の蓄積で自己の内面を、生々しく美しく表現する舞台に。ふたつの対照的な方向に、それぞれの可能性がひらけているのだらう。個人的には「オーディエンス賞」の舞台にとともに共感した。批評家じゃないからか。井上。●1月某日、岡山のすろおが463というギャラリーへ、会場に入ると、壁に舞う鳥が映っている。青地大輔は、鳥をテーマに岡山で作品を作り続けている。鳥の大群は紺色の空を巡回している。短いループで繰り返されている映像作品だ。隣にあるスクリーンは、夕暮れのような赤い色だけが映し出されている。人が両手を広げて自身の影



幼児のおもちゃのように雑然と置かれてはいるものの、会ったことがある人のような親近感をおぼえる。壁に張られたドローイングも、知っているようなものをモチーフに描かれている、表現形態の違うユーレイなのだろう。ユーレイたちはどこから来たものか、国籍や時代を改めて確認する必要はないだろう。モニターに映し出されている、捨てられたペットボトルが川下でゆらゆらと漂っている映像のように、そんなユーレイたちも日常の中でたえずさまよっているはずだから。2004年12月4日～2005年1月15日開催(藤田千彩)



OM2の佐々木敦 撮影/青木司

M.S.A. (Mentally Shocking Arts) コレクションに集まる今日のアヴァンギャルドたちからは、「人間」の息吹はあまり感じられない。事態はむしろ逆と思える。「人間」は剥奪され、大きな力に晒されている。彼女を取り巻く風景は緑なき荒地であり、癒しや安らぎを得る場所などどこにもない。「人間」を剥奪された彼女が孤立して廃墟に立つ、これがM.S.A.コレクション

劇場を徘徊する、不在という幽霊。資本の支配から自由な都市を幻視する、アジア7カ国の俳優たち

「アジア現代演劇コラボレーションプロジェクト」
中間発表会「アジアの社会から」

遊園地再
スタート1月





撮影 / 引地 信彦

1年をかけた「『舞台の作り方』の試み」の「集大成」（宮沢章夫）として上演された遊園地再生事業団+ニブロール「トーキョー不在/ハムレット」は、「北川辺町サーガ」とでも呼ぶべき閉ざされた町の物語で、父親を殺されかつての叔父が自分の母親と再婚し、しかも父親を殺したのは叔父であるとの噂が囂霊によってもたらされるという状況を組み込んだ「ハムレット」のパロディ的側面も持ち併せ、妻はハムレットならぬ不在の半礼秋人による復讐劇が、いささか複雑な人間関係の群像を執拗に追うように展開される。

確かに「トーキョー不在/ハムレット」には映像・音楽・ダンス・装置等々仕掛けが多く、演劇には筋や俳優の演技以外にもみるべきところがたくさんあることを教えてくれるという意味で本作は「観ること」の教育劇たる一面を持つといえそうだが、上記要素はいずれも多くの演劇が内包しているものであり、観客がそれらを「観ること」を禁じられてもいない以上、こうした表層的な諸要素の顕在化を以て本作を「新しさ」や「可能性」に類する語で評価する振る舞いは、当の舞台表現をほとんど「観て」などいなかったことを告白するに等しい。また、舞台後方で反復される、演技をビデオで撮影し舞台上のスクリーンに映し出す仕掛けを以て「シュミラークルと化した現在のリアリティの表現」などと捉えてしまうならば、それはどう考えても年少者の殺人をゲーム（バーチャルリアリティ）の弊害だと指摘して憚らないワイドショー的な想像力と何ら怪異がなくなってしまう。

もう一つ「トーキョー不在/ハムレット」において目を引くのは本作の舞台に立つ「若くてヘタな俳優陣」であろうが、ここでいうヘタさとは、演技が舞台上のキャラクター設定や状況・関係にふさわしいものに見えず乖離ばかりが目立つ点を指し、しかもともと演劇において役と俳優の乖離は合理的な必然でもあり、宮沢章夫は演劇なるものの原理を前景化したのだと考えられもし、これを単に「下手」と断じることは慎みたい。現実的にも遊園地再生事業団が演技の上手い俳優を（思い通りとは行かずとも）揃えることが不可能だったとは考えにくく、これはエピソードの実演とそれに続く心境・状況説明のモノログという流れを、山の事事情が「狭衣驚愕剣翹」でみせた種の語る身体で演じ切ることなど微塵も期待せず、むしろ観客にさえ見える殺気や息の長い小説の文体ばかりを観客が気にしてもなお、宮沢章夫が「若くてヘタな俳優陣」を選んだことを意味し、そのヘタさは粗野な感が否めないダンスによってさらに際立ちもするが、興味深いのはそれらが作品としての不完全な印象（ちぐはぐさ）において奇妙な邂逅を遂げってしまう舞台表現の妙である。本作において演出の緻密さを顕揚するとしたら、それはこうした不均衡の均衡とでも呼ぶべきバランスにおいて他になく、だから「北川辺町に『不在』があった」と同時に、「トーキョー不在/ハムレット」と題された舞台表現にもまた、偏在する主題として「不在」（=欠如）ばかりが寄せ集められていたであり、ないものばかりがあった。

結局、本作を録取るかのように冒頭・結末で反復された場面における「なんかしょぼいっすね」という言葉こそが「トーキョー不在/ハムレット」をほどよく要約してみせる一語に他ならず、矢内原美邦を迎え、「若くてヘタな俳優陣」に諸要素を前景化しながら宮沢章夫が目指したのは、秋人の「不在」をめぐる物語を借りながらもその舞台にこそ演劇的なもの「不在」が満ち溢れているという逆説的に向き合い、周到に選ばとられた徹底的な貧しさを抱えつつ「しょぼい」という自己言及的な台詞に耐えてみせることだったに違いない。さらにはこうした舞台が4,500円の「チケット料金」で上演されるという現実こそが本作の持つ批評性ですらあるように思えるのは、「トーキョー不在/ハムレット」が「しょぼい」と切り捨て得るほどに明瞭な輪郭さえ具えず、だから「なんかしょぼい」ものであり続ける他い舞台表現は、自らのしほさすら確認できないままに「できないが故に、トーキョーという街に幽霊のように現れては現代演劇の貧しさについて『なんかしょぼいっすね』と不穏な言葉を残して、消える。（松本和也/近代文学・現代演劇）

世田谷パブリックシアターと国際交流基金の企画企画である「アジア現代演劇コラボレーションプロジェクト」は、2002年に始まった。参加者は東南アジアを中心に、インドネシア、マレーシア、シンガポール、フィリピン、タイ、アメリカ、日本という7カ国の16人の演劇人である。参加者相互のディスカッションとワークショップで作品を作り上げていく。太陽劇団などに代表される集団創造のプロセスを参考にしているようだ。

2003年の2月に「アジアの演劇の中へ」と題して、各参加者のレクチャーやパフォーマンス及びシンポジウムが行なわれ、次に2004年3月に中間発表会「アジアの社会から」が開催された。そして2005年3月に3年間のプロジェクトの集大成となる作品がシアタートラムで上演される予定だ。

ところで、このような演劇における国際的なコラボレーションで注意すべきことがある。それは、私達は色々な国籍の人々が同一の舞台上に立っていることから、まるでそのような共同の場があらかじめ存在すると考えがちなけれども、実際のところそのような場は色々なところからお金が出ているために存在しているに過ぎないということだ。ここで反論として、例えばアジアという場が共同の場だという主張が出てくるかもしれないが、アジアという概念には曖昧なところがあり、そしてアジア的な本質などないというのが常識的な見方だろう。といっても多くのお金をかけてまでコラボレーションをすることに反対するということではない。だが、なぜ共同の場を努力して作るのか、そしてその意義はどこにあるのかについて考えてコラボレーションを進めるべきだろう。

中間発表会「アジアの社会から」では、上演された3つの作品のうちの1つで、そのような共同の場についての考察がなされていた。ここでそれを紹介したい。その作品は「This is our city」という題名である。舞台上には、ずっとゲームに没頭するゲーム男や家族に宛てる自分の自殺ビデオを撮影しているビデオ女など不幸な人々がいる。そこにアーティストという男が現れて、自分の一週間を話す。水曜日に集団自殺があったとか、金曜日に幼女レイプの事件が起こったとか、不幸な事件の一週間だ。まあこの舞台上は現代都市社会の縮図を表わしていると言っていいたいだろう。そこにヒーローという男が現れて、舞台上の人々に「our city」（私達の都市）を作れと命令する。アーティストを除く舞台上の人々は自分達の望むものを都市計画に組み入れ、その都市で「This is our city！」（これは私達の都市だ）と呼び、自由に歓喜する。だが果たしたことは、欲しいものを全て手に入れられる場所が理想郷なのではないと皆気付く。ヒーローは再び「This is our city！」と呼び声をかけるが、舞台上の誰ももう返事をしない。ヒーローは無然として舞台を去る。

この「our city」というものが、資本の力で無理に作られた共同の場であるの言うまでもない。実際、人々がそれぞれ望むものを作るとは、非現実な予算を必要とする都市建設となるだろう。何の倫理もなく、ただ資本によって保証された共産の主張が破綻するのは当然だ。社会の矛盾を全て隠蔽できる資本などどこにもないのだから、だがコラボレーション・プロジェクト一般が、このように資本によって無理に作られた共同の場になる危険性に満ちている（演劇実践一般がとっていいかもしれない）。

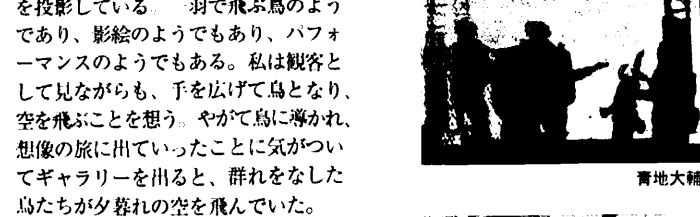
ヒーローが去った後、アーティストが再び登場し、観客に自分自身の心で内省するようにと10の質問をする。「私はこれまでどのような人生を送ってきたか」「愛から何を学んだか」など、その10の質問は舞台上の役者達によって、タイ語など各言語で告げられ、告げた役者から順に舞台を去っていく。

だが果たして個人で内省して何が見つかるのだろうか。それは舞台という共同の場で行なうべきことなのか。疑問はある。舞台では、最後、質問を告げなかった一人の役者が残り、爆竹を鳴らす。これは、内省の傾向に対して違和感はあるが、しかし現在、資本の力に従属せずに、舞台上でできることとはといえば、せいぜい爆竹を鳴らすくらいでしかないという意味だろう。

中間発表会ではここまで考えられていた。2005年3月に3年間のプロジェクトの集大成となる作品がシアタートラムで上演される。この爆竹がどのように変化しているかに期待したい。（荻野哲矢/演劇批評）

アジア現代演劇コラボレーションプロジェクト「ホテル・グランド・アジア」は、3月8日～17日（木）シアタートラムで上演。

※おことわり。この原稿を変更したものが、CUT IN 33号に、著者の了解なく掲載されました。こちらが原文です。不手際をお詫言します。井上



青地大輔

2005年1月12日～24日に開催。（藤田千彩）

●1月某日、東京・神楽坂の児玉画廊へ、金氏徹平「白夜のユーレイ」展へ。一般にギャラリーは、ホワイトキューブと呼ばれるように、白い壁で囲まれている。そんな室内を白夜とするならば、白いかたまりのような人形がユーレイだろうか、机の上にたくさん「居る」。



金氏徹平

Dr.エクアドルのロマンティック汚れモード⑦

「オレは言ってるだけの奴が嫌いなのだ。」



ミュージシャンによる地雷除去キャンペーンなんかを見ると平和主義メッセージに不快感を覚え、コヴァヤら「つくる会」やら歴史修正主義者の発言を聞くとなしヨナリズムって嫌だなど感じるんだか右左どっちつかずの俺ではあるが、左右どちらの言動も面白ければOKという不謹慎なスタンスでチェックしたい。で、最近読んだ本はワイドショーのコメンテーターとしても活躍中の精神科医、香山リカ著「〈私〉の愛国心」。最近の右傾化の風潮を「不安」をキーワードに読み込むというなかなか興味深い試みで、他の香山リカの著作、発言よりもかなり楽しめた。でも、結局展開されているのはフロイト的「了解」で、「分析する私はメタ・レベルに立ってます」感が相変わらず感じ悪い。

80年代に「現代思想ととんねるずとオリゴCCが大好き」と連載プロフィールに明記した彼女は前々回離れ

た岡崎京子と同様、ミーハーっぷりをあえて武器と見なすタイプだが、アンテナの鈍さから来るズレ加減を精神医学用語で補強する姑息さから、メディアでは決して悪口言われない岡崎京子と比べ、よく批判の俎上にあがる。この著でも「生きにくさ」の表明という枠で、金原ひとみ、浜崎あゆみ、鬼東ちひろを同列に論じるという「大冒険」を演じており、「おいおい、それはないんじゃないか？」とつっこもうにも向こうは「無意識」を持ち出してくるので黙るしかない。「無意識バナ」ってむかつくよな。だから「今流行の『愛国心』なんてたいした意味ナシ」っていう結論は納得できるが、その過程が違和感だらけで好感もてない。単純な図式に収めようとするし、変な危機感はある「実体論を徹底して排した相対主義」を経由した形跡が一切ない。最近では永井均を愛読してるらしいが、「言ってるだけ」じゃないの？ ホント、インチキくさいよな。精神分析学って…病理分析って…そういうものなの？

Dr.エクアドル
 ゴキブリコンビナー主宰
 goki-con@interlink.or.jp

※長い連載でした。今回で終了です。ご愛読ありがとうございました。Dr.エクアドルの再会をどうぞお楽しみに（編集より）。

die prätze M.S.A. collection 2005

～何かの病原因に犯される錯覚に陥ってしまいそうな先進的で衝撃的なディ・ブラッツ芸術展～

- 日程: 3/16(水)～5/5(木・祝)
■チケット予約: チケットぴあ 0570-02-9988/神楽坂die prätze 03-3235-7990
■会場: 麻布die prätze/神楽坂die prätze

- (麻布die prätze)
・中野成樹 (POOL-5)+フランケンズ [ラブコメ]
・演劇崇拜◎自動焦点「私たちは何をしているのか分からないが何かをしている。」



←写真左より中野成樹 (POOL-5) +フランケンズ、楽園王、OM-2

- (神楽坂die prätze)
・鼠派演路監『サド・死の宴』(30周年記念公演)
・イマージュオペラ>>コントラーアタック<<「油田」

schedule for February 2005

TINY ALICE

新宿区新宿2-13-6 光聖ビルB1 tel&fax 03-3354-7307

- 2/1(火)～2/2(水) ■桜会
「平家05 木曾義仲」03-3401-4403(桜会)
2/11(金)～2/13(日) ■Jules + ジュール
「砂城のピシヨッ」03-3228-4536

「豊半豊vol.3 ちょっとした舞・踊の祭典」

中西レモン企画「豊半豊vol.3」 2/14(月)～16(水) @神楽坂die prätze 問=rero2remon@hotmail.com

Q一舞台面積が豊半豊ということですが。
A一これは高円寺の無力無善寺というライブハウスで出て来た寸法で、狭くて、客席数を考えたら舞台この位になるんです。

踊祭と冠するわけですよ、この催しに。それに豊半豊で。舞台上の動線に依拠する装飾を出演者は削がれますよ。

A一そうですね。ダンサーを醜態するのであれば、あの、これ誘導尋問ですね。しかしね、強制的に生命の燃焼を体現してくれる可能性が高いものダンサーを自負する方の中に、見出しやすいように思いますよ。

A一いや、もう僕も半ば忘れてますから、ほじくるのは豊半豊で十分ですから。後ね、レモン組って、言う活動も細々と展開しようかなと思ってましてですね。

DIE PRATZE

JOIN IN THE PICNIC 期待の公演情報

◆神楽坂die prätze
2/21(月)～2/23(水) NIPAF
「第12回日本国際パフォーマンス・アート・フェスティバル(ニポパ05)
◆麻布die prätze
2/18(金)～2/20(日) 劇団豆☆六句



全ての状況を瞬時に「出現」させる闊達な表現手法に拍手! 活写された「美しいお骨が夢」村の興亡。

昨年上海演劇大学から、3年に1度開催する国際実験演劇祭

TINY ALICE

来て町に行くには手形が必要と村の老婆(宗貞樹子)のところ

in Shanghai)にAlice Festival 2004から何かいい作品をどう
依頼をもったとき、私は躊躇なくAlice賞の劇団から「キリンの
眼」を推した。それから始まったいろいろな連絡やりとり。そのう
ちの一つに、作・演出の池田美樹さんから新作「はね屋」で行きた
い、それで熊本、福岡、東京へも、という希望が出た。で、そのことを
上海に。まだ見てない作品、さてそのタイトルをどう伝えよう? 頭
をかき上げて、とりあえずBone-sellerと直訳しておいた。そしてい
よいよタイニイアリスへ。上海でスタンディング・オベーションも出たと
聞く「はね屋」、待ちに待った東京登場であった。

初日を見終わって、あら、大変。これは骨を売る人々の話では
なくて、骨たち。骨そのものの話だった。きつこの作品を創るとき
池田美樹は自分の腕をじっと見つめ、その骨が、生きたーい、死
にたなへいと無言で叫んでいるのに気づいた——そんな刻を
持ったにちがいない。そう私は思った。

そこはいつか、ただ美しいお骨になることだけを夢みる人々の
村。焼き場の、人が青い炎に包まれ、お骨になっていくシーンから
始まっていった。そこへ、肉を食べ、したがって狩をし、その毛皮
をとって町で売ること知っている男(渡辺コウスケ)がやってくる。

崖に落ちて偶然助かったのだ。村
の人々はその男に教えるように次第
に肉を食べるようになり、町へ行って
「お金」を得るといふことや、それで
欲しいものを「買う」といふことも知っ
ていき、だんだん太っていく。身にま
とう衣服の色も清楚な青から派手派
手の赤へと変わってしまった。やがて、



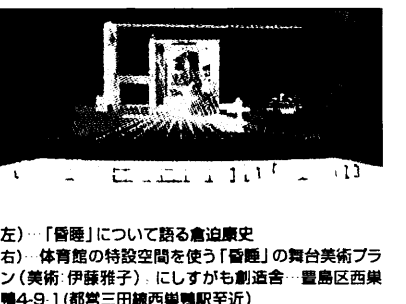
東京国際芸術祭(TIF)2005。地域の実力派による 入念な舞台が、演劇の新しい可能性を示す。

地域劇団との共同作業に力を注いできたTIFでは、2005年の
芸術祭の一環として、この2月に地域から生まれた意欲的な新作
企画2本を上演します。一つは創作ネットワーク委員会+Ort.d.d
プロデュースによる「昏睡」、もう一つは劇団・飛ぶ劇場の「Red
Room Radio」です。

■「昏睡」創作ネットワーク委員会+Ort.d.d プロデュース
会場/にしがも創造舎特設劇場 2月24日(木)~28日(月)
この公演を主催する創作ネットワーク委員会とは、各地域で先
鋭的な活動を続ける劇団の主宰者により、演劇の新しい形を発信
するために結成された連携組織です。そのメンバーは以下の5人。
代表:倉迫康史(Ort.d.d 東京都、宮崎県宮崎市)、自由下僕
(POP THEATRE 山形県柳井市)、泊篤志(飛ぶ劇場
福岡県北九州市)、水山智行(劇団こぶく劇場 宮崎県都城市)、
森本孝文(演劇企画 夢ORES 鳥取県鳥取市)

演出は上記メンバーのうち4名が担当。この方法について総合
演出を担当する倉迫は次のように述べています。
「まず、こぶく劇場の水山が、7つのシーンからなる2人芝居を書き
おろしました。兵士と捕虜、国王と伴侶、あるいは無名の市民など
の男女2人が、戦争、殺戮、性愛にまつわる対話を繰り返すオム
ニバス風な作品です。この台本を、東京、山口、北九州、宮崎、鳥
取の5地域で分担して製作し、最後に菅が宮崎に集まって激論を
戦わせながら一つの舞台にまとめていきます。違う土地の集団が
5つ集まれば、各々の文化的背景、俳優の年代(20~40代)、劇団
のあり方、表現力など、様々な違いが見えてくる。めざすところは、

お互いの差異を如何に認識し、その上でどのような価値観を共有
できるのかということ。とくに今回の台本は、僕たちに歴史認識の
あり方を鋭く問うている。それに応えて、僕たちなりの歴史観を打
ち出せるような舞台に仕上げたい。」
5都市の5劇団がく「神話の都」宮崎に集い、新しいプロセスで
発信する表現。さらに今回、東京公演はにしがも創造舎(旧朝
日中学校)の体育館に特設劇場を設けての上演。自由な空間創
造も期待されます。「多様な価値観が共存する」(倉迫 談)豊か
な舞台となるでしょう。
【昏睡】問合せ 東京国際芸術祭(TIF) TEL03-5962-5202
http://anj.or.jp/ チケットぴあ TEL0570-02-9988/0570-02-
9966 (Pコード358-889 料金 一般3000円 学生2000円(前売
当日とも)



左)「昏睡」について語る倉迫康史
右) 体育館の特設空間を使う「昏睡」の舞台美術プラン(美術:伊藤雅子)にしがも創造舎…豊島区西巢
鴨4-9-1(都営三田線西巢鴨駅近)

アートネットワーク・ジャパン MONTHLY LETTER Vol.14

■「Red Room Radio」飛ぶ劇場
会場/東京芸術劇場小ホール2 3月11日(金)~13日(日)
北九州市より、常に刺激的な表現を発信し続ける飛ぶ劇場の
新作。今回はラジオ番組「Red Room Radio」の呼びかけに応
えて集まった視聴者たちが繰り広げる、奇妙で残酷なパルティの
様子を観る。視性を知らぬ人々どうしが、弱さを露わにしたとき
、人間としてのタガがはずれ——近親殺人も横行する21世紀の
日本で、人間には何かおかしな「進化」が起きているのではない
か。そんな肌寒さを、ライト感覚な表現で伝える佳作。九州での
先行上演では早くも大きな注目を集めています。現代演劇の一
つの先端と言える舞台に、ご注目。
【Red Room Radio】問合せ 飛ぶ劇場 TEL/FAX. 093-372-
0299 料金 前売2800円 当日3000円



【Red Room Radio】

2/21(月)~2/23(水) ■NIPAF
【第12回日本国際パフォーマンス・アート・フェスティバル(ニパフ05)
NIPAF東京-NIPAF愛知-NIPAF京都-NIPAF長野-NIPAF台湾-高雄-
TIPAF台湾-台北】 問:045-543-9521 Email nipaf@avls.ne.jp
☆出演=アレスター・マクラン(北アイルランド、ベルファースト、男) エス
テル・フェレル(スペイン、バルビエン、女) イシュバン・カントール(カナ
ダ、トロント、男) アルビンドラ・エレーラ(チリ、バルビエン、女) ジェ
ン・リム(シンガポール、男) ヲグエント・マン(ベトナム、ハノイ、男) 他
2/25(金)~2/27(日) ■劇団ココロ×ココロ
【幻術神-GENRYUJIN】 問:03-3960-2690
☆出演=横山 演出=のむらそうし 出演=東海林由夏 安部知子 田島
文人 萩原輪子 内山鏡彦 田辺英二 間根久美子 他 ◎千年の封印
が解け、再び甦る鬼神を甦す為に長い眠りについた男と日常を待て余す一人
の少年。出会うはずなかった人々の心の光と闇。神は人の心を持て成す
3/4(金)~3/6(日) ■劇団X-tension
【フル・コンサート(仮)】 問:070-6464-6661
☆作=又吉和行 ☆演出=大和みき ☆出演=せんすいかずひろ 井藤たけ
し 相沢二葉 CHIAKI 他 ◎大金を手に入れようとする誘拐を行う3人。だが
良ししくない頭と賢くない人たちが要求する様はとても滑稽で。そこにお
かしな謎が浮かんで来て…
3/8(火)&3/9(水) ■NOsense
【椅子(イス)から(カラ) LOUCUS(ローカス)へへ)】
問:090-1262-3586
☆作・演出=ノシロオコ ☆出演=栗生圭子 田中敏恵 /シロオコ
◎日常とその延長の動きを重ねて遊ぶダンス・パフォーマンス。「人と座
所」を「身体とイス」に見立てた「椅子」と身体の遊戯ゲーム「LOCUS」を
合わせて上演。

麻布 die prazze 〒106-0044 港区麻布 1-26-6-2F T&F03-5545-1385

2/3(木)~2/6(日) ■Spaced Out
【「デビュタント」~幻の色】 問:090-9825-5614
☆構成=三井アヤ ☆演出=Spaced Out ☆出演=Spaced Out 他
◎水の中、土の呼吸、眠る種、廻り続けるモノはあなたにとても寄り添う。通
が速く、乱振れる、憧れのその日まで…
2/11(金)~2/13(日) ■ST企画 劇団美舞和
【10th Year Anniversary Dance file「月~か~や~」】
問:042-354-6485
☆作=凡樹 ☆演出=谷口聖一 ☆出演=花田麻由子 畠山礼子 他
◎ST企画の新ユニット「美舞和」のデビュー公演、ダンス中心の作品。
2/18(金)~2/20(日) ■劇団豆☆六句
【ロッキー・ホラー和尚】 問:090-6527-5071
http://r-h-oshow.hp.infoseek.co.jp/index.html
☆作=七回樹ヒノ子 ☆演出=瀬戸山陽子 ☆出演=竹内智大 山田宗一郎
水内祥世 河川菜穂 佐藤大悟 他
2/23(水) ■レモン組
【監禁行 若子快砲】 問:rero2remon@hotmail.com
☆演出=中西レモン ☆出演=藤岡千幸 相良ゆみ 藤井洋平 尾林星
中西レモン ◎ダンサーもそうではない素人もいっしょくたになってどうし
うもない心の奥底を吐き出そうと希望するユニットレモン組の何時行わ
れるとも知れない公演。権無懸念。
2/25(金)~2/27(日) ■ハイパネカタ
【ノア】 問:090-1510-2341
☆作・演出=服部結二 ☆出演=田中ゆみ 小島有紀子 服部結二 他
◎とある雑誌社に特ダネが舞い込む。歴史から消された古代、その謎を追
う現代、そしてもう一つの世界。全ての中心にあるのは、小笠原に人知れず
存在する鳥だ。た。
3/4(金)~3/6(日) ■劇団天然カルーアミルク
【Good Morning, Dear.】 問:080-3254-1431
☆作・演出=尾田美穂 ☆出演=鹿ノ戸雅子 宮本禮都美 渡部昌考 柏木
宜子 湯藤孝吉 尾田美穂 ◎第7回にして初の再演。人の中にあるやさ
さを切なくも美しいストーリーに乗せてお届けします。「望んだ未来ならさ
つと、静かにこの手の中に降りて来る」

CUT INは「タイニイ・アリス」、「ディ・プラッツ」、「アートネットワ
ークジャパン」の3つの団体が発行する、新しい表現のための新聞です。

御意見、御感想などお聞かせください。
kousukeogasawara@mail.goo.ne.jp (小笠原)